Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-11

きつね・病・死のしらせ ： 兵庫県三田市における怪異譚を中心として

久下, 正史

(Citation)
鶴山論叢,03:45-58

(Issue Date)
2003-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001445

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001445

調査報告

きつね・病・死のしらせ

――兵庫県三田市における怪異譚を中心として――

久下　正史

【要旨】
兵庫県三田市域を中心とした、きつね・病の見立て・死のしらせ等の報告六件と、市内で発刊された書籍に収録されている怪異譚五例の報告である。伝聞のみならず、実際にきつねに化かされた人物の経験もあり、民俗社会におけるこれらの怪異に対する意識をしることのできる事例として貴重なものである。

【キーワード】
怪異譚（mysterious tales）・きつね（*Kitsune*）・病（*Yamai*）・死のしらせ（*Sinosirase*）

はじめに

兵庫県三田市は兵庫県中部に位置し、旧摂津国有馬郡と川辺郡の一部を市域としている。近年は住宅地の開発により全国一の人口増加率を示したことによって知られるが、一部の新興住宅地をのぞいて市域のほとんどは稲作を中心とした農村である。

市域において調査を行う内、きつねや病等に関していくつかの話を聞くことができた。調査の合間に断片的に聞いたものがほとんどであるが、伝聞ではなく、実際にきつねに化かされた人物の話もあり興味深い資料と思われる。今回いくつか分量も整ったので報告することとしたい。

なお、報告に関しては内容の性格上、地名・人名等を伏せた部分があることをあらかじめ了解されたい。

きつねに化かされることは、「化かされる」・「つままれる」・「だまされる」などと市域では言う。それらの用法は話者の用法によった。

きつねに化かされた話　三田市下槻瀬

羽束川をはさんで家の真向かいに親戚ではないがＩという同姓の家がある。終戦の前、そこの家の三つ程年上の人が戦死して、遺骨が帰ってくると言うことで、遺骨を迎えに村で木器の停留所まで行った。その場には在郷軍人会で父が出ているし、母も婦人会で出ているので、自分はＩさんの家まで送らなくてもよいだろうと思って遺骨を送らず自転車で先に自分の家に戻っていた。

しかし、大分経っても両親とも戻ってこない。

「親戚でもないのになんでこんな遅いんやろ。」

と思って、家の裏の道を様子を見に行った。羽束川の板橋の手前からＩさんの家を見てみると、その家の座敷に電気が、障子の桟まで見えるほどにあかあかと点いていた。そして、おっさん(1)があげているお経の声と鉦の音も聞こえてきた。これを見て、

「親戚でもないのにこんな時間までおる訳がない。もうすぐ帰ってくるやろう。」

と思って橋の所から引き返した。

家に帰ってはみたものの、やはり一向に家の者が帰ってこない。

「こんなことでは飯も食えへんやないか。」

と思っていたら、大分してからやっと両親が帰ってきた。

「何をしとったんや、橋のとこまで様子まで見にいったんやど。」

と言ったら、両親は、

「Ｉさんの家へ着くなり帰ってきたで。」

と答えた。

「それはおかしい、自分はＩさんの家に電気が点いとるのも見たし、おっさんがあげとってん(2)お経の声と鉦の音も聞いたんや。」

と言ったのだが、両親は、

「そんなことはない、自分らはすぐに帰ってきた。」

と言う。

「おかしい、どない言うことや。」

と思って、明くる日、羽束川の板橋の所まで行って見てみると、Ｉさんの家の母屋は、納屋にかくれていて橋の所からは見えない。板橋の所から見える納屋には窓もなく、板橋の所から障子が見えたりするような造りの家ではなかった。また、その家は橋から遠く離れていて、障子の桟が見えたり、お経の声が聞こえてきたりするような距離にある家ではなかった。

そこではたと気づいたのだが、その板橋の両側は竹藪になっていて、陰気なところで、きつねに化かされると良く

言われていた場所であったのだ。
「こらきつねに化かされたんやな！」
と思った。それまではきつねに化かされるとは聞いてはいても半信半疑でいたが、
「なるほど。きつねに化かされるとはこう言うことなんや。」
と思って、おかしいことではあるが、きつねに化かされると言うことはあるものだと思った。
きつねに化かされると、ありえへんくらいにはっきりと物が見えたりすると言う。障子の桟がはっきり見えたと言うのもまさにそれに当たるであろう。
たしかに、きつねに化かされた話は昔から聞いていた。大坂峠を歩いていたら、法事のごっそうのアブラゲを取られた、とか、婚礼に行ったけれども、その日の晩に帰ってこないで、明くる日の朝にどろどろになって帰ってきて、ええ道があったさかいこっちやと思て行ったら溝にはまっとった、などというような話である。そう言うことはおかしいことだが、
「いっぺん化かされてみるとそう言うこともほんまにあるもんなんや。」
と思う。
この辺りには、確かにきつねがたくさん住んでいる。土葬にしていた時分は、土をかぶせているだけではきつねが棺桶が見えるくらいにまで土を掘り返してしまうので、穴を石で塞いだこともあった。羽束川の板橋の所の籔と、上のお稲荷さんにはよくきつねが住んでいて、現在でも夜になったら行き来をしている鳴き声が聞こえる。「籔と稲荷についとるきつね」だと言っている。

（下槻瀬　大正十五年生　男性）

（1）僧侶。
（2）敬語。あげていらっしゃる。

きつねにつままれた話　三田市小柿

きつねにつままれると言うのは昔はあった。
もう亡くなった人だが、今生きていたら九十五くらいになる人である。その人が小さい頃の話だから大正初め頃のことになるだろう。ニシトラ(1)のKさんのだんなのお兄さんにあたる人で、自分たちはチュンメサン、チュンメサンとよく呼んでいた。名前はKさんと言う人である。
そのチュンメサンが子供の時に、夏祭に行って、その晩に行方が知れなくなった。
「こらえらいこっちゃ。」
と言う事になって祭どころではなくなって、村中総出で探

すことになった。探して歩いていたら、チュンメサンはとても子供が行くような所ではない山の中で発見された。みんな、

「きつねにつままれたんやろう。」

と言いあった。

この話は非常に有名な話で、小柿の人ならみんな知っているだろう。

うちの家のおばあさんから聞いた話では、「さらのはきもんを昼からおろしたらあかん。」と言うけれども、チュンメサンは祭やと言うことで、嬉しがって昼から履き物をおろして祭に行った。だからきつねにつままれたのであろうと言うことである。

きつねが物を山に持っていくと言うことは今も良くあることである。Hのミッチャンも免許証がない、免許証がない、と言っていたらその免許証が山の中で見つかった、と言うことがあった。また、うちの家も玄関からよく靴がなくなったりするが、それらはきつねが山に持っていっているのである。

きつねにはつままれたりするが、たぬきは人をつまんだりはしない。よくたぬきにつままれる、と言うが、あれはテレビの話で、そう言うことはこの辺ではない。

（小柿　昭和二年生　女性）

（1）屋号。

きつねに憑かれた話

三田市の隣、篠山市の話である。

篠山市のHと言う村のTさんの娘さんがきつねに憑かれたことがある。

ある日、急に娘さんがいなくなった。家の者がどこを探しても姿が見えず、

「おらへん。おらへん。」

と言うことで、

「これはきつねに憑かれたんとちがうか。」

と言う事になった。そこで、イズモサンという拝み屋さんに頼んで拝んでもらった。そうすると、イズモサンは、

「船坂(1)の木にひっかけといた。」

と言った。そこで、家のものがそちらの方に行ってみたら、いなくなった娘さんががぼっろぼっろになって出てきた。

自分が娘時分に有名になった話である。私らでも知っている。そんなに古い話ではないので、Hの村に行って聞いてみたらすぐに分かるだろう。

（岩倉　昭和初年生　女性）

（1）地名。兵庫県西宮市山口町。

死のしらせ

昔は病院が近くになかったし、往診してもらうにも往診料が高くつくのでなかなか医者を呼べなかった。だから、病気になったらこの辺りでは見比のF家のおばあさんで「おゆきさん」という人が拝んでくれるので、その人に頼みに行っていた。子供が小さい時分は、「子供が熱出した。」などと言ったら行っていたものである。おゆきさんの所に行ったら拝んでくれてちょいちょいとした薬をくれた。

私の嫁入り先のおばあさん（姑）もおゆきさんによく見てもらっていた。おばあさんは長いこと病気で寝ていたのだが、ある晩に、

「具合がわるいさかい見てもうてきてくれ。」

とおばあさんが言うので、私がおゆきさんの所に見てもらいに行った。行く途中、見比の公会堂（1）の前で、金縛りというやつになった。身の毛がよだつようになってさぶいぼ（2）ができて前に進めなくなった。進むに進めず、

「これは、拝んでもうても仕方ないということやろう。」

と思って家に帰ったら、すぐしておばあさんがなくなった。

「こういうことはあるもんやなぁ。」

と思った。

Sのふみさんが死んだ時もそうなった。

「ふみさんあかんなー。」

と思ったら確かにそうなっていた。

（小柿　昭和七年生　女性）

（1）慈徳寺と言う廃寺を引き継ぎ、不動明王を祀っている堂でもある。公会堂の脇には近世の巡礼供養碑などの一群がある。

（2）鳥肌が立って。

火の玉　小柿

火の玉と言うのはいやらしい（1）虫の大きなかたまりが火を出すのである。雨が降ったらその虫のかたまりが燃えるのである。いっぺん墓でその虫が地面に落ちたのを見たが、いやらしーい虫だった。

（小柿　昭和二年生　女性）

（1）気味の悪い。

病の見立て　広野

昔、まだレントゲンが市内の病院にはない頃の話である。

家内の鼻の横が急にぶーっと腫れだして、痛がるので市内のＳ病院に見てもらいに行った。そうすると、Ｓ病院の先生は、

「多分、歯がおかしい所に生えよるんやろうけど、いっぺん、レントゲンのある県立病院まで行って見てもーてこい。」

と言う。そこで、紹介状をもらって神戸の県立病院まで行った。そうして、県立病院でレントゲンを撮ってもらったら、県立病院の先生にも、

「これは歯がはえよるんや。手術せなあかん。」

といわれた。そして、撮ってもらったレントゲンを持って、再び市内のＳ病院に行って先生に見てもらっても、

「やっぱり歯がはえよるんや。」

と言うことであった。

その時はちょうど麦刈りの頃で、まだ作業が機械化される前だから人手がいる。だから入院して手術することができない。麦刈りが終わっても、すぐ田植えでまた人手が要るので入院できない。

「入院して手術するのは田植えの後になるなぁ。」

と言ったら、

「まぁ仕方ない。」

と言うことになって、田植えの後に神戸の県立病院に入院して手術することになった。

それでも入院したり手術したりと言うのは大変なことなので、手術の前に、いつも見てもらう吉川(1)の「オダイッサン（お大師さん）」の所に相談に行った。そうすると、部屋に入るなり、こちらはまだ何も言わないのに、

「こらあかん。手術なんかしたらあかん。これは歯がはえよるんやないで。手術なんかしたら顔に傷がつくだけや。」

と言われた。そこで、オダイッサンに祈祷をしてもらった。そうすると見事に腫れが治ってしまった。

「何も言うてへんのに見ただけでそんだけ分かるとはすごいもんや。」

と感心した。

そして、話者の老人はこう言った。

なんぼ偉い先生にレントゲンまで撮ってもうて見てもうて、

「こうや。」

と言われても、見ただけでそれよりももっとちゃんと良う分かる人はおるもんです。そら、吉川のオダイッサンはたいしたもんですで。

（広野　大正三年生　男性）

（1）地名。兵庫県三木市。

三田市域の拝み屋さん・行者

三田市域においては病の祈祷などを行っていた拝み屋さんがかつては何人かいたようである。病院がいまだ整備されていなかった昭和三十年代から四十年代までは子供が熱が出た、とか腹痛になった、とかと言えば祈祷をしてもらい、人によっては薬も処方してくれたようである。死の予兆の話でも分かるように、子供のみならず、病で寝たきりになった老人などに対しても祈祷を行っていたようである。

三田市の高平地区では、三人の拝み屋さんの存在を知ることが出来る。下槻瀬の男性に聞くと、あまり良い顔をしないで、

下槻瀬の宮さん（天柏神社）の向こうにおばあさんが一人で住んでいた。この村の人ではなくて、よそから移ってきた人である。七十からの人で「拝み屋さん」と呼んでいた。ここらの人が来ていたのは知らないが、よそからちょくちょく来ていた。きつねが憑いたりしにも拝んでくれて、拝んだら「きつねがどく」と言っていた。

と言った話を聞かせてくれたが、女性に聞くとごく当然のように話してくれる場合が多い。また、その拝み屋さんも「見比のF家のおばあさん」であったり、木器で聞いたところでは、

昔、自分の実家のおばあさんが拝み屋さんをしていて、その時に祀っていた神さんがあって、何の神さんか知らないが今も祀っている。

と言うように、特別な家柄や特定の人物がなるというようなものではなかったようである。ごく普通の家の女性が何かの契機に拝み屋さんになっていたようである。

他方、男性でも、市内においては生業の傍ら行者（修験者）の修行を行い、その験力によって病等の祈祷を行う者が少なくなかった。高平地区では小柿のF家のオモヤ（本家）の当主が行者として病の祈祷をよく行っていたと言い、旧有馬郡内では現在では現役を退いてはいるが、病などに対する祈祷を行っていた行者がいる。その行者は、老年になり足が不自由になったのであるが、

昔は病院ゆうてもなかなかいけへんださかい皆行者やらに病気をみてもうたもんや。今はほとんどおらへんけど、うちにもよう病気みてくれゆうて来る人が

おった。

うちのおじいさんもおやじも祈祷をようやっとって、わしもやってみたい思たから祈祷を勉強してやった。祈祷しようと思たら修行して験を積まないかん。せやさかいわしもよう方々へ修行に行たもんや。瀧修行やらもようした。Ｏさん（先輩格の行者の名）やらは「祈祷したら悪いもんを引き受けることになる。」言うてそういうことするんを嫌うてやけど、わしはしてみたかったさかいいろいろ祈祷した。せやけど、今、足悪うして不自由になったんは、祈祷して人の悪いもんをかぶったさかいかもしれん。

と言っている。

行者になる者もその契機として、大病をして行者の修行をするようになったと言ったものや、家族が行者をしていたからと言うものなど個人的な経験や、親がしていたといった理由によって行者になり、祈祷を行うのも個人的な理由から行うものが多かったようである。また、人々も日常的にそれらの人々の力を借りていたようである。

近年の文献資料から

以上、調査において採録された怪異譚であるが、市内で発行された既存の文献にもいくつか類話が採録されている。近年に発刊されたものではあるが、一般には入手困難であり、報告の補足ともなるので紹介したい。また、いずれも地元の老人によって書かれたものであり、彼らの怪異に対する意識も分かる興味深い資料でもある。

西村忠敦『北摂羽束の郷土史誌』（六甲タイムス、一九九五）所収の話である。著者は大正十四年三田市小柿生。

子供の道草

昭和初期までの子供たちには、次のようなことがよく話題になりました。

あそこの道の角や、真昼でも大木の陰になる場所は、夜になると幽霊が出るとか正念玉が出るとかいう、怖い場所が幾つかありました。

大人達には無縁の気にもとめない話ですが、子供の世界では流布され信じられていました。

夕方遅くにそこを通ると狐にだまされるとかいうわけで、少年少女たちにとっては気になる不安な、奇妙な妖気が漂う場所でした。

この話の起源は不明で、上級生から次々に下級生に伝承されてきたのでしょう。

夕方暗くなるまで友達と遊び回っていて、帰って来ない子供を心配した親が子供たちに対する作り話で警鐘の句にしたのか。それとも子供たちの自作演出なのかわかりませんが、いずれにしても愉快な小話といえそうです。

それらの場所は通行する道路で、

橋のたもとの椿の木付近
峠山の回り角付近
十王ヶ鼻の剣先付近
下の郷の寺付近
中筋通りの藪付近
上の郷の十三仏付近
……

幽霊を見た

大正末期のことです。お寺の老母堂が隣村寺院を訪問されての帰途、時刻は真っ暗やみの午後九時頃、一人で提灯の明かりを頼りに夜のあぜ道をとぼとぼ歩いてきて、別れ道の杉の大木の先端を見ると、金の入れ歯をして着物を着た美しい婦人が「ニタッ」と笑いながら幽霊となって現れました。

びっくり仰天したご母堂は、急ぎ足で土橋を渡り、ある郷のお婆さんたちが集まっている家に飛び込んで、怖い幽霊の話をみんなにされました。ところが、何とその時刻に、近くで病臥中のご婦人が亡くなられたことが分かり、その場に集まっていたみんなは、不思議な因縁にただ驚くばかりでした。

このことがもとで、ご母堂は心労と肩こりが起きて、二、三日病床につかれたとのことです。

亡くなられたご婦人は、主人と日頃から夫婦仲が悪く口論が絶えなかったので、老母堂がいつも心にとめて、けんかの仲裁をされていたのです。

ちなみに幽霊は、この世に生まれ心を成就できない人や、執念が深かった人の霊が成仏できないで、魂がさまよえるときに出るとも世間で説法されていますが、一概にそうだと信じ難いところがあります。

しかし、これを単に迷信とか、たわむれときめつけるほどには、人の生死にかかわることを論じるのは、難しいことなのです。

次は、三田市社会福祉協議会・三田市老人クラブ連合会『文化伝承活動』第三集所収の鈴鹿老人クラブ「安楽寺縁起・幽霊・憑きもの」に収録されているものである。

この冊子は各村々老人クラブが任意に題材を選んで各編を編集し、それを総合したものである。鈴鹿老人クラブの章の内第二節「幽霊・憑きもの」に収録されている三話を引用する。いずれも鈴鹿老人クラブの会員によって書かれたものである。

まず第一話であるが、昭和十七年、筆者が二十歳の時の祖母の臨終に関わる人魂の経験を感動的に記したものである。筆者は未詳。

（1）鍬を持った人に追われた人魂

世の中の人が人魂と言えば、幼いころに見たことがあるとか、昔の人から聞いたことがあるとか、真剣に話し合う話題の一つであると思います。

人々の話を総合すると、人魂は燐の固まりで、小さなボールのような形で空中にふわりふわりと浮遊して、やがてどこかへ消えてしまうそうである。人それぞれに一つの魂ありと言うが、自分でその魂を見たことがある人はいないのではないかと思う。しかし、人間がこの世を最後とする時、その人から魂が抜けて死に至ると仏説ではいっております。

それで少しの間、私の記憶の中から一部を紹介してみたいと思います。

それは昭和十七年七月のことです。今から五十八年前で、私が二十歳のときでありました。祖母は慶応三年生まれ、その当時七十一歳でしたが、持病のリウマチが悪化し、この世との別れもきょうかあすかと、家族の者が毎日毎日夜となく昼となく付き添って看病しておりました。

七月一日夜十一時頃と思いますが、今まで夢路をたどっていた祖母が突然大きなため息をついて目をさまし、がたがた震えだし、前身汗びっしょりになりました。どうしたのかと、家族の者みんな顔をのぞき込み、タオルで顔をふくやら水を飲ますやらして大騒ぎとなりました。

その時、祖母は小さな声で、アアこわかった。夢であってよかったと言い、そのおそろしかったことを、次のように話してくれました。

祖母は田の水が気になって仕方がないので、自分の田を見に行ったそうである。（それは夢の中で）そのとき、鍬を持った男の人にどんどん追いかけられ、そ

れはそれは一生懸命に逃げたそうである。自分の家まで帰って来ると、その鍬を持った人はすごすごと帰って行った、とそこまで話を続けた時、表で戸をたたく音がするので、私が出てみると、それは隣りのおじさん、庄平さんでした。

「光ちゃん不思議なことがあるものですなァ。おれが昼に田に水がはいらないので、先ほど（午後十一時）自分の田に水を入れようと、鍬で堰を作っていると、青い火の固まりが空中にふわりふわり浮いているではないか、おれは腰を抜かしてしまい、それから起き上がって鍬でたたき落としてやろうと思い、振り上げたがなかなはたき落とすことができず、あちこちに飛び回るので、何の手ごたえもなく、とうとう追いかけている間に、お宅の家まで来てしまい、その辺で、消えてなくなった。

本当に不思議なことだ。淋しいやら、おそろしいやらで、それで飛んで来たのだ、」

と、息も絶え絶えに話を続けた。

私は、病む祖母と隣りの庄平さんの双方の話を聞き、しばらく目をつむって考えていたが、それは隣りの庄平さんが祖母の魂、すなわち人魂が田の辺で浮遊しているのを、鍬で追いかけていたのだ、と知ることができました。

その話を聞いていた父（当時四十五歳）は涙を流して、いく度も頭を下げた。その父の胸には、先祖より預った田畑を近日中に人の手に渡ることになっていたのです。病む祖母は言葉では何も言えず、足も立たず、ただ魂だけがなつかしい田畑の上をさまよっていたのではなかろうか、と父の脳裏をかすめていたのでしょう。

明くる日、父はこう言いました。人魂が落ちた所には、かならず虫の幼虫が一かたまりとなっている、と昔の人が言っていた。一度、隣りの庄平さんが見た人魂の落ちた場所へ行こうと言って、一家の者があちこち捜している時、妹がこんな所に虫が一ぱい、と呼びました。皆走り寄ったら、それはそれは、何百匹という幼虫が一かたまりとなって、うようよしている。家族の者が目を皿にして、これが人魂の落ちた所か、不思議不思議と見つめているうちに、その幼虫はどうして地下にもぐったのか、数分のうちに見えなくなってしまいました。人魂の虫は、人に見られるとすぐ消えてしまうと昔から言伝えがある、と父は話を続けました。

それから一ヶ月後八月十四日、祖母は帰らぬ人とな

りました。さて、こうして記憶をたどって書いていると感動に胸おどり、半世紀前のできごとが、まざまざとよみがえり、人魂のことを真実と思いますが、科学的現実的にと理論をのべる人々もあると思いますが、尊い人間の生命、そしてその人の魂などなど、仏教的にどう解するか、私の残る人生の課題であると思っています。

次も筆者未詳である。筆者三歳、大正七年の時の話で、主には隣家の老人から何度もきかされた話である。

(2) 幽霊を背負った話

私は現在七十八歳ですが、三歳の秋のことでした(大正七年)。何か隣りの家で大声で叫び泣きかなしむのを、家の外で遊んでいた私は、何ごとだろうと思い、走って情況を見に行きました。

その家の人の話しや近所の人々の話の内容から、子ども心に何かをつかむことができました。それは次のようなことがらで、実に不思議な事実です。

その家に九歳になる勝三という男の子がおりました。私は父と共によくその家へ風呂に入れてもらいに行きました。勝三さんはやせ細って、いつも寝床で顔だけをこちらに向けて寝ておりました。聞けば六か月ほど前から、胃腸をこわして下痢ばかりで、食欲もなく、見るからにお気毒な有様でした。学校もほとんど休み、医者がよく診察に来ておりました。

そこで、私の見た大騒ぎのあった日のことです。

家のおじいさんは、お風呂の薪を取りに山へ行きました。一生懸命薪をこしらえていると、下の方から大きな声で、おじいさん、おじいさん、早く帰らないと日が暮れるで……と叫ぶ声がしたのです。おじいさんは声のする方へ駆け下りると、そこに今まで家に寝ていたはずの、勝三さんが紺がすりの着物を着て、草履をはいて立っているではないか……おじいさんはびっくりして、おまえ、こんなところまで来たのか、あぶないあぶないと言いながら頭をなでて、さァ、おじいさんが背負って帰ってやろうと、その子を背中におんぶして山を下りて来ました。そうすると、現在この村のお墓のある、すこし下まで来ると、その家のおばあさんの「おやゑ」さんという方が、おじいさんおじいさん、早く帰って……勝三が今、死んだ、早く早くと、息も絶え絶えに叫びながら山を上がって来た。

おじいさんは「何を言っているのか、勝三は今、お

れが背負っているのではないか……馬鹿なこというな……」とうしろを振り返ってみると、今まで背中にいたはずの勝三がおらない。手は後ろにまわしたままです。

「アレッ」と叫びながら、「夢みたいだ……不思議なことだ、ほんに不思議だ」と、おじいさんは気が抜けてしまって、そこにへたへたとすわり込んでしまいました。

おやゑさんは、勝三が幽霊となって、死んでからすぐに貴男のそばに飛んで来たのでしょう。よくかわいがった貴男ですから、忘れなかったのでしょう。サァ、気を取りなおして家に帰ろう、と二人は悲しみながら家に着きました。

そのとき、大ぜいの人々が早くもお悔やみに訪れていました。

なんと、不思議なこともあるものだと、その当時の事を思い出して記してみました。

その後、おじいさんは生涯、何度も何度も勝三さんを背中におんぶした様子を、私たちに話してくれました。

これも筆者未詳である。明治三十五年の話で、父親からの伝聞である。

（3）狐、狸は人をだますか、だまされた話

いま、私が父から聞いた話を語ろうと思うが、なにゆえか、抵抗を感じる。いまの世の人にとっては、そんな風景があっただろうかと考えられるからです。

高平の奥地の末吉村から柏原まで、約四ＫＭ、いまはゴルフ場となり、柏原にもゴルフ場ができて、一望幾ＫＭ、みはるかす緑地と化してしまったが、明治三十五年、いまから百年も昔のこと、父が二十歳の頃であったらしい。竹籠を作って行商に出るのが日課であった。山間僻地を通って、人の行けない所へ行商に行けば、売れゆきもよいので、その日は五十センチ幅の細い山道を、うっそうたる杉の林の中を柏原まで行ったが、どうしてもその日は売れず、夕やみ迫る峠を越して帰路に着いた。そのとき、どうしたことか、着物のすそが急に重くなり、足元がもつれて歩けなくなってしまった。あたりは深閑として、淋しさがひとしお身に迫る。籠をおろして、しばらくしてまた歩こうとするれども、どうしても歩けない。あまりの淋しさに、おっ母ァーと叫んだ声は四方にこだまして、そ

の声だけが遠く尾を引く。

泣けてきて仕方ない。今度は道なき所に入ってしまった。いばらの一ぱいある山の中に踏み込んでいたのである。もうどうすることもできない。これは、確かに狐狸のしわざではないかと思い出した。

父は持っていた握り飯を四辺にバラまいた。自分には見えないが、カサカサという音がして、またもとの静けさにかえった。狐などは火というのがきらいということを思い出し、持っていたマッチをすって灯をつけた。それからスックと立ちあがってみた。着物が軽い。足を一歩出したら歩ける。アア歩ける。驚きと喜びで一ぱいである。山道が杉の木の下に白く、続いてみえる。それから何なく山を下りて家路にたどりついた。

父はここまで話を続け、最後に、狐たちもよほど腹がすいていたのであろう。握り飯がほしさに、まつわりついたのではないか、でもひどい目にあった。それからあの山道を通るときは弁当を持たずに行き来したと言っていた。

今から考えてみると、とても珍しい話だが……百年も前のことだから、あの奥山には、たくさんの狐狸がいて、こんなこともあっただろうと思われてならない。

おわりに

以上、兵庫県三田市を中心に、きつね・死のしらせ・病の見立て等に関する話を六事例報告した。また、近年の文献資料に見られる地元の老人による報告を五例紹介した。何れの話も話者にとっては事実として認識されている話である。特に、筆者の報告した一事例と、『文化伝承活動』第三集に収録されている事例は実際に経験した人物の報告として興味深い事例であろう。

また、病の見立てに関しては、話者は近代医学の診断と民間宗教者の呪術的な診断を等価のものとして判断し、結果として民間の宗教者の診断をよりすぐれたものとして判断し、呪術的な治療を選択している。民俗社会における医学観として常に認識しておくべき事実であると思われる。

（くげ　まさふみ、神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程）